

景清道を訪ねて

- 安土から五個荘へ -



探訪されるみなさまへ

- ここに掲載している情報は、平成24年夏現在のものです。探訪される際には、公開の有無・休館日・料金などあらためてご確認ください。
- ゴミは各自で持ち帰る、騒がないなどマナーを守ってください。

埋蔵文化財活用ブックレット4

景清道を訪ねて - 安土から五個荘へ -

刊行：平成24年10月日
編集：滋賀県教育委員会
印刷：●●印刷株式会社
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電話：077(528)4674 FAX:077(528)4956
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp























はじめに - 景清道を訪ねて -

安土から五個荘にかけては、平安時代末期から戦国時代にかけて、多くの戦国武将たちの足跡が残っています。平安末期、平家再興を祈願するため、京を目指した平家の家人で、悪七兵衛あくしちひょうえの異名を持つ伊藤景清が通ったとされる景清道をはじめ、中世近江を守護として統治した佐々木六角氏の居城観音寺城とその城下町石寺、近世の扉を開いた織田信長が、法華宗の勢力をそぐために行った安土宗論の舞台浄厳院じょうごいんなどがあります。また、五個荘は、近世から近代にかけて、日本にとどまらず、世界を舞台をに活躍した近江商人たちのふるさとでもあります。

この探訪ではそうした先人たちの足跡をたどり、安土・五個荘の豊かな歴史に触れていただきたいと思います。

【凡 例】

- | | |
|--|---|
|  寺社仏閣など見どころ |  よろず買い物 |
|  史跡・名勝など見どころ |  コンビニエンスストア |
|  石碑など |  お食事処 |
|  駅や公共施設 |  喫茶処 |
|  駐車場 |  甘味処（お菓子） |
|  トイレ |  お茶屋さん |
|  警察署・交番 |  お酒屋さん |
|  学校・幼稚園・保育園 |  お魚屋さん（湖魚） |
|  郵便局 |  ガソリンスタンド |
|  銀行など |  お宿 |

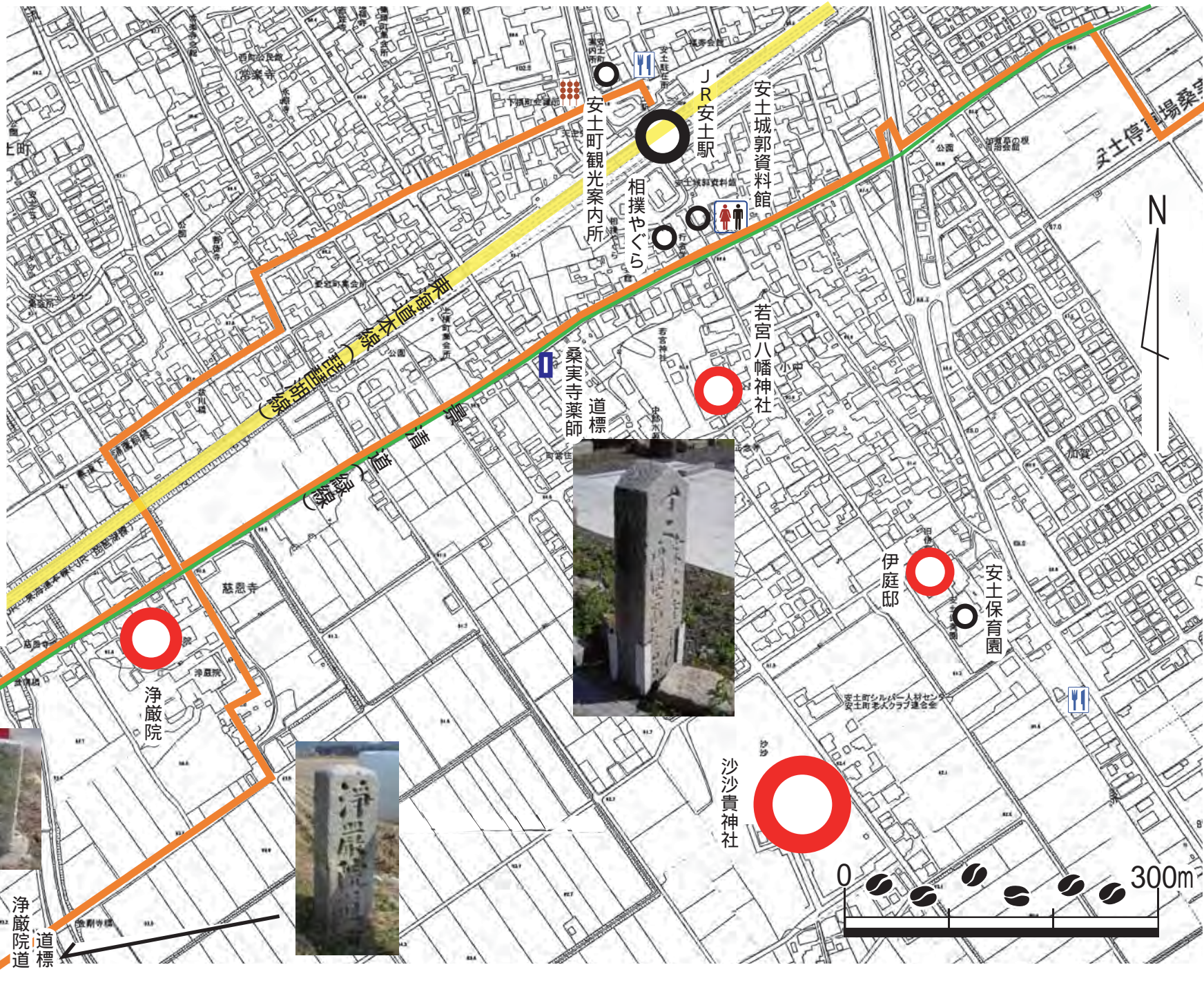
目 次

はじめに 景清道を訪ねて～安土から五個荘へ	1
目次	2
景清道を訪ねて～安土から五個荘へ	3
浄厳院	5
沙沙貴神社	6
伊庭邸・若宮八幡神社	7
景清道・安土城郭資料館	8
安土瓢箪山古墳	9
鳥打峠	11
観音寺城と佐々木六角氏	13
城下町石寺	15
日吉神社	16
教林坊	17
中山道	19
八幡神社と五重石塔・東近江市五個荘金堂重要伝統的建造物群保存地区	23
大城神社・勝徳寺	25
浄栄寺・金堂陣屋跡	26
弘誓寺・金堂まちなみ保存交流館	27
五個荘近江商人屋敷（中江準五郎邸・外村宇兵衛邸）	28
五個荘近江商人屋敷（外村繁邸・藤井彦四郎邸）	29
ぶらざ三方よし・てんびんの里～近江商人博物館・観峰館	30

安土駅から出発!

探しに行こう
町の文化財を
さあ

半日コース



じょうごいん 浄厳院

浄厳院は、安土城下慈恩寺の地に信長が建立した浄土宗の名刹です。『信長公記』に「安土町末」と記されているように、この付近が城下町の西端と考えられます。

浄厳院の起源は、応永11年(1404)、隆堯りゅうぎょう法印が金勝山きんしょうざん(現滋賀県栗東市)に建てた浄厳坊という草堂です。同じ金勝山にある阿弥陀寺八世あつよめいかん応誉明感の高徳に感じ入った信長が、安土へ呼び寄せ、寺院を建立したのです。この時信長は、移転の命令に従わない場合、寺領を没収するという強い姿勢でぞんではいます。こうして建立された浄厳院は、江戸時代には浄土宗の近江一國惣本山として八百余ヶ寺の末寺を持つ大寺院となります。

浄厳院の名がよく知られているのは、天正7年(1579)に行われた安土宗論の舞台となったからです。これは、法華宗と浄土宗とが浄厳院本堂を舞台として宗教上の論争を行ったものですが、信長によって浄土宗側の勝利と裁定されました。この結果法華宗側は、今後他宗に法論を仕掛けないことを約束する詫び証文を書かされます。こうして中世京都において一大勢力を誇った法華宗は著しく衰退させられることになりました。一説には、この宗論は信長が法華宗の勢力を削ぐために仕組んだものともいわれています。

浄厳院には、こうした歴史的背景のもと多くの什物じゅうもつが伝来しており、その多くが文化財指定を受けています。絵画には平安時代から江戸時代にかけての浄土教美術の代表作が多く見られ、浄土教関係の書跡・典籍関係がまとまって伝わっています。また境内に建つ建造物についても貴重なものが多く、本堂・楼門ろうもんが国の重要文化財の指定を受けているほか、不動堂・鐘楼しょうろう



浄厳院本堂

が近江八幡市指定文化財となっています。

本堂は、もとは多賀(現近江八幡市多賀町)にあった興隆寺の弥勒堂を移築したものです。昭和42年(1967)に解体修理工事が行われ、本堂の改築の変遷が明らかになりました。興隆寺は天台宗寺院であったため、移築前の本堂は、内陣と外陣に区画する天台密教系本堂の様式を備えていました。しかし、信長がこれを浄厳院に移築した際に、内陣と外陣の間の格子を取り払い、両脇の小部屋を二間四方の余間に造り替えて、浄土宗系の本堂に改造しています。

楼門は、明治22年(1889)の台風で壊れたときの応急的な修理として切妻きりづまの屋根に、棧瓦さんがわらが葺かれていたものを、平成7～9年(1995～1997)の解体修理により、本来の姿である入母屋造り、本瓦葺ほんがわらぶきに復元されました。またその時に実施された発掘調査の結果、他から移築されたものではなく、もともとの地に建っていた慈恩寺の建物ではないかと考えられています。

ささき 沙沙貴神社

祭神は少名彦名命すくなひこなのみこと、大彦命、仁徳天皇、宇多天皇・敦実親王あつざねしんのうの四座。延喜式神名帳に記載された同名の神社に比定されています。また、中世近江を支配した近江源氏佐々木氏の氏神として知られています。天正9年(1581)に、信長から雁・鶴を与えられた返礼に、町人たちが沙沙貴神社で能を催したことが『信長公記』に記されています。

現在は、本殿・中門・透塀すきべい・権殿ごんでん・拝殿・楼門・東廻廊・西廻廊の建物があり、いずれも滋賀県指定文化財となっています。

境内には佐々木氏ゆかりの石造物が多く残されています。参道に建つ灯籠は丸亀京極家から寄進されたものです。また、日露戦争で活躍した乃木希典のぎまれすけが寄進した石灯籠と、自身で植えたとされる松の木があります。



沙沙貴神社本殿

いば 伊庭邸

住友家第2代総理事伊庭貞剛^{いばていこう} (1847 ~ 1926) が建てさせた邸宅です。貞剛は、蒲生郡西宿村(現近江八幡市)の生まれで、司法省を経て住友家に入り、別子銅山煙害問題などに力を尽くし、57歳で引退した後は石山(滋賀県大津市)の別荘で余生を送りました。

この邸宅は、大正2年(1913)に完成したのち、後に安土村長を務めた伊庭貞剛の四男伊庭慎吉が暮らすことになりました。設計を担当したのはアメリカ人の建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズです。構造は木造3階建て。洋風の外観を持ちながら巧みに和風を取り入れたヴォーリズ初期の意欲的な作品で、**近江八幡市指定文化財**となっています。

要予約。0748-36-5529
(近江八幡市文化観光課)



伊庭邸

若宮八幡神社

創建年代不詳。樹下神社^{じゅげ}(滋賀県滋賀郡志賀町)所蔵の大般若経の刊記には、康暦元年(1379)に近江守護であった六角氏頼が「江州佐々木新八幡宮」に経典を奉納したことが記されています。この佐々木新八幡宮が若宮八幡神社にあたるのではないかとされています。



若宮八幡神社

かけきよみち 景清道

東山道から^{きぬがさやま}織山の南麓、石寺を通り、織山中の鳥打峠を越え、桑実寺から小中の集落を経て浄厳院の門前を通る道です。平安末期の平家の家人伊藤景清が、平家再興を祈願するため尾張より京都へ行く際に通ったことに由来するといわれています。あるいは主要道をさけて通る「かげのみち」からきているとする説もあります。



山裾をゆく景清道

安土城郭資料館

天主の模型を展示しています。この模型は分割式で、天主の内部の様子を見ることができます。

休館日：月曜・年末年始

入館料：大人 200 円

学生 150 円 小人 100 円

電話：0748-46-5616



安土城郭資料館



滋賀県立安土城考古博物館には安土瓢箪山古墳をはじめとする古墳時代の考古資料が展示されています。

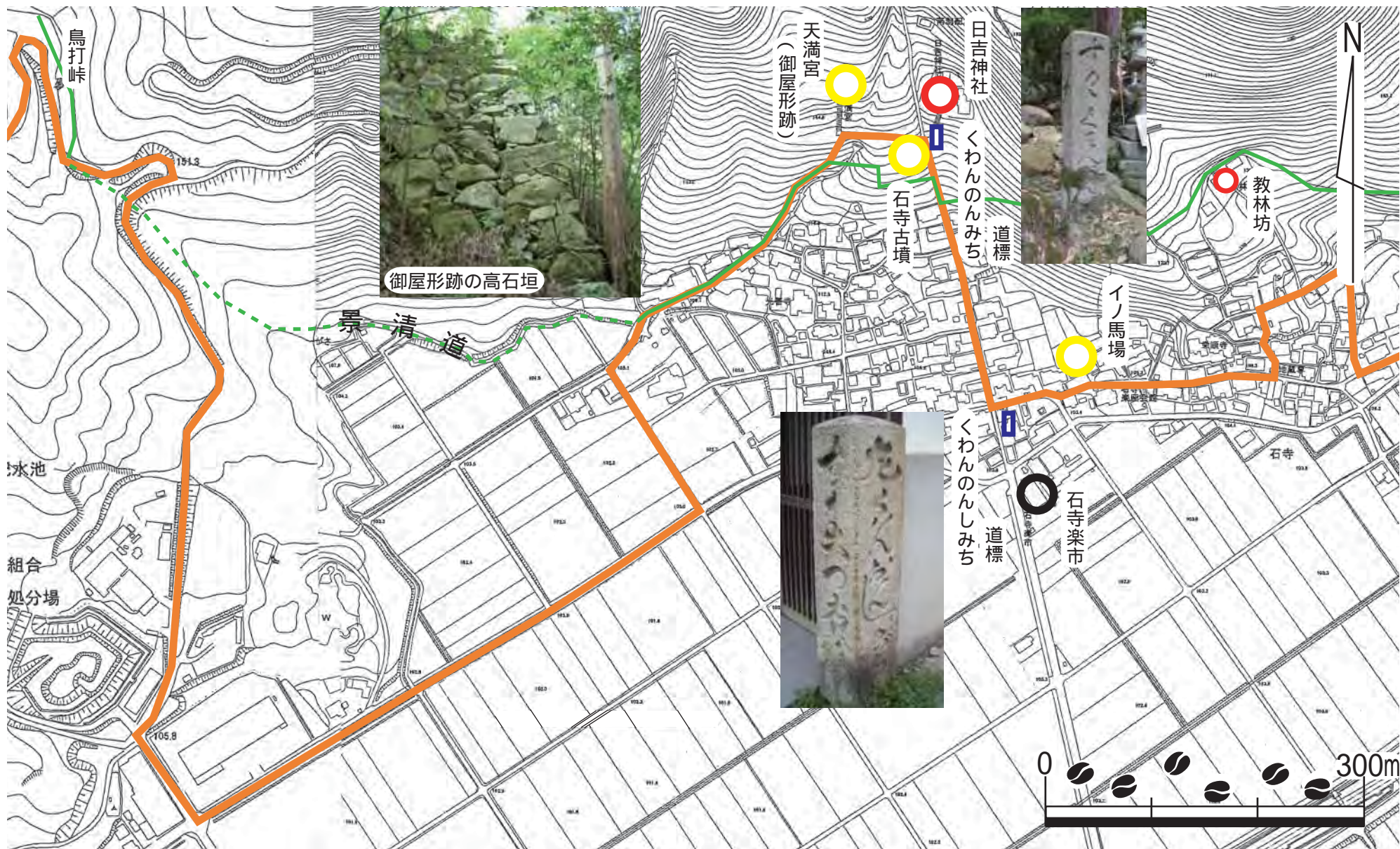
休館日：月曜日・年末年始
 入館料：大人 400 円・高
 大生 250 円
 電話：0748-46-2424

ひょうたんやま
安土瓢箪山古墳

4 世紀中頃に築かれた県下最大の前方後円墳です（国の**史跡**）。墳丘上からは 5 つの埋葬施設が発見されました。墳丘はきぬがさやま織山の麓から東につきだした丘陵上を利用して築かれており、全長約 134m、後円部の直径約 78m、高さは約 13m になります。発見された埋葬施設（3 基の竪穴式石室と 2 基の箱式石棺）からは中国製や倭製の銅鏡や玉類・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・短甲などの豊富な副葬品が出土しています。墳丘の巨大さや、豊富な副葬品からは、この古墳に葬られた人物が、県内でももっとも強大な権力を持った

人物であることを想像させます。

当時この丘陵は内湖に突出しており、また墳丘の背後には景清道の前身の道が通っていました。水陸両方の交通の要衝にあたるこの地に葬られた人物は、古墳の立地からみても、強大な権力をもった有力者であったことは間違いありません。具体的には、蒲生郡に勢力を誇った在地豪族ささき佐々貴山君やまのみにつながる人物だった可能性が指摘されています。



鳥打峠

織山とその南西に位置する鳥打山との間にある峠で、湖岸と湖東平野とを結ぶ幹線路となっていました。景清道もまたこの峠を越えて通っています。

信長が安土城下町を築いた安土町下豊浦周辺は、奈良時代に聖武天皇によって薬師寺に施入された豊浦荘と重なります。この時の施入願文には荘域の南端を「南限鳥坂長峯」と記していますが、鳥打峠周辺を指すと考えられています。

観音寺城と佐々木六角氏

佐々木氏は宇多天皇の皇子敦実親王^{あつざね}を祖とする宇多源氏の一族です。平安時代末期、佐々木秀義が源頼朝の挙兵に一族を率いて参加し、源平合戦で戦功を上げた結果、長男定綱が近江国惣追補使^{そうついぶし}（のちの守護職）に任せられ、以後佐々木氏の惣領家が代々近江守護職を務めます。定綱の子信綱の死後、四人の男子が所領を分割して独立しますが、惣領家^{そうりょうけ}となった三男泰綱の子孫が六角氏を名乗り、近江守護職を継承していきます。途中、家中の内紛や様々な諸勢力との対立などでしばしばその支配を動揺させた六角氏ですが、鎌倉時代から織田信長によって近江を逐われるまでの約四百年にわたって守護として領国支配を維持し続けた点は評価できる点でしょう。

一般に領主としての実力を低く見られがちな六角氏ですが、誤ったイメージといわざるを得ません。

この六角氏が戦国時代に居城としたのが観音寺城です。標高 432m の織山の山頂から南山麓にかけて郭が広がる大城郭で、中世五大山城の一つに数えられ、国の**史跡**に指定されています。

観音寺城が登場するのは南北朝時代。佐々木氏頼が観音寺に布陣したことが『太平記』に記されていますが、この時は単なる砦のようなものだったと思われます。それ以後もしばしば陣所とされているようですが、佐々木六角氏の居住する城として整備されたのは、16 世紀前半のことと考えられます。

観音寺城の特徴は石垣を多用している点にあります。安土城より古い時期に石垣が築かれた城として近年注目されています。

観音寺城は、本谷を挟んで観音正寺境内の向かい側にある、伝本丸、伝



伝本丸裏虎口

平井丸、伝池田丸といった郭が、城内でも特に面積が大きく、方形志向の平面形を呈し、大石を使った壮大な石塁が郭を囲んでいます。天文 13 年 (1544) に城を訪れた連歌師谷宗牧^{そうぼく}は、山上の城の「御二階」の座敷に案内され、そこには「数寄」の茶室に茶器の名品が用意されていて、城の退出にあたっては秘蔵の古筆を送られたと書いています。観音寺城が要塞であるとともに、六角氏の風雅な生活の場所であったことがうかがえます。また、昭和 44 年・45 年 (1969・1970) に行われた発掘調査では、これらの郭から建物礎石や庭園遺構、排水路、溜枘^{ためます}などの遺構が発見されました。また、大量の土師器やすり鉢、輸入陶磁器など、16 世紀後半の生活遺物が出土しています。これらの調査結果から、戦国期に現状見られるような形に城が整備されたこと、また、山上の郭群で生活するようになったことがうかがえます。

永禄 11 年 (1568) に織田信長が観音寺城を攻撃すると、六角承禎・義治親子は正面から戦うことなく逃亡し、あっけなく開城しました。その後、天正 7 年 (1579) に安土城が完成したことで、観音寺城は歴史的役割を終えたといわれています。



伝池田丸跡



伝平井丸跡虎口

城下町石寺

石寺は織山の南麓に広がる集落で、近江守護六角氏の居城観音寺城の城下町があった場所です。石寺の名前が史料に現れるのは文明元年(1469)からですが、観音寺城が城郭として整備され始めるのもこの頃からと考えられ、城郭と合わせて城下の整備も進められたものと考えられます。

石寺の構造については地名や地籍図、発掘調査成果をもとに解明が進められています。現在も山麓部分に住宅が建ち並んでいますが、こうした景観は城下町時代とほぼ同じと考えられます。宅地部分のもっとも高い場所に天満宮があります。ここは「上御用屋敷」の地名が残り、六角氏の御屋形跡に比定されています。郭を形作る石垣は、城内でももっとも高い石垣

です。ここから山麓にかけて郭が^{ひなだん}雑壇状に広がっています。これらは家臣団あるいは直属の商工業者の屋敷跡や、観音正寺の坊跡と考えられていますが、これらをどう区別していくかが今後の課題です。



「イノ馬場」現況

集落の南側は田地となっています。現在はほ場整備により地割が代わっていますが、もとは蒲郡条里方向の地割が残っていました。したがってこの部分は居住域ではなかったと考えられます。さらに南、現在の新幹線と観音正寺へ向かう参道とが交わるところが東山道からの分岐点です。この付近には「構口」という地名があり、城下町の入口を示すものと考えられます。また、石寺の中央を南北に貫通する観音正寺の参道、東側に広い郭がありますが、ここには「イノ馬場」の地名が残されています。かつて、六角氏がこの場所で犬追物を行ったことに由来するといわれています。また、観音寺城本丸御殿の障壁画であったとされる犬追物図も伝わっています。

ところで石寺といえば史上初めて楽市が実施されたことで知られています。天文18年(1549)に近江守護六角氏の奉行人から枝村(滋賀県犬上郡豊郷町)商人に宛てて出された文書には、「紙商買の事、石寺新市の儀、楽市たるの条、是非に及ばず」として石寺新市を楽市とする旨の文言が書かれています。この石寺新市の場所については、^{おいそ}奥石神社付近に「エビス」という地名があることから、この付近に比定されています。「構口」よりも南にあたり、城下町の外にあったこととなりますが、戦国期の城下町は、一般的に家臣団や直属商工業者が暮らす町場と商業活動の場である市場が分離していたと考えられ、石寺についてもそうした戦国期城下町特有の構造を持っていたものと考えられます。しかし近年、現石寺集落のすぐ南側にも「エビス」の地名があることから、こちらを石寺新市の場所とする見解が出されており、石寺城下町の再検討が進められつつあります。



石寺楽市(買い物などができます)

日吉神社

坂本の日吉神社から^{かんじょう}勧請されたと伝わりますが、その年代は不明です。慶長10年(1605)の棟札から、かつては十禅師権現と呼ばれていたことがわかります。

平安時代の作とされる地蔵菩薩が伝えられていますが、これはこの日吉神社の^{ほんちぶつ}本地仏であったとされるものです。また、文禄5年(1596)の銘が刻まれた^{しょうこ}鉦鼓が伝わっており、いずれも近江八幡市指定文化財です。



日吉神社

きょうりんぼう
教林坊

教林坊は、織山山麓の石寺集落内に位置する天台宗寺院です。かつては、最盛期には70を超える坊舎・子院があったとされる観音正寺の子院の一つでした。

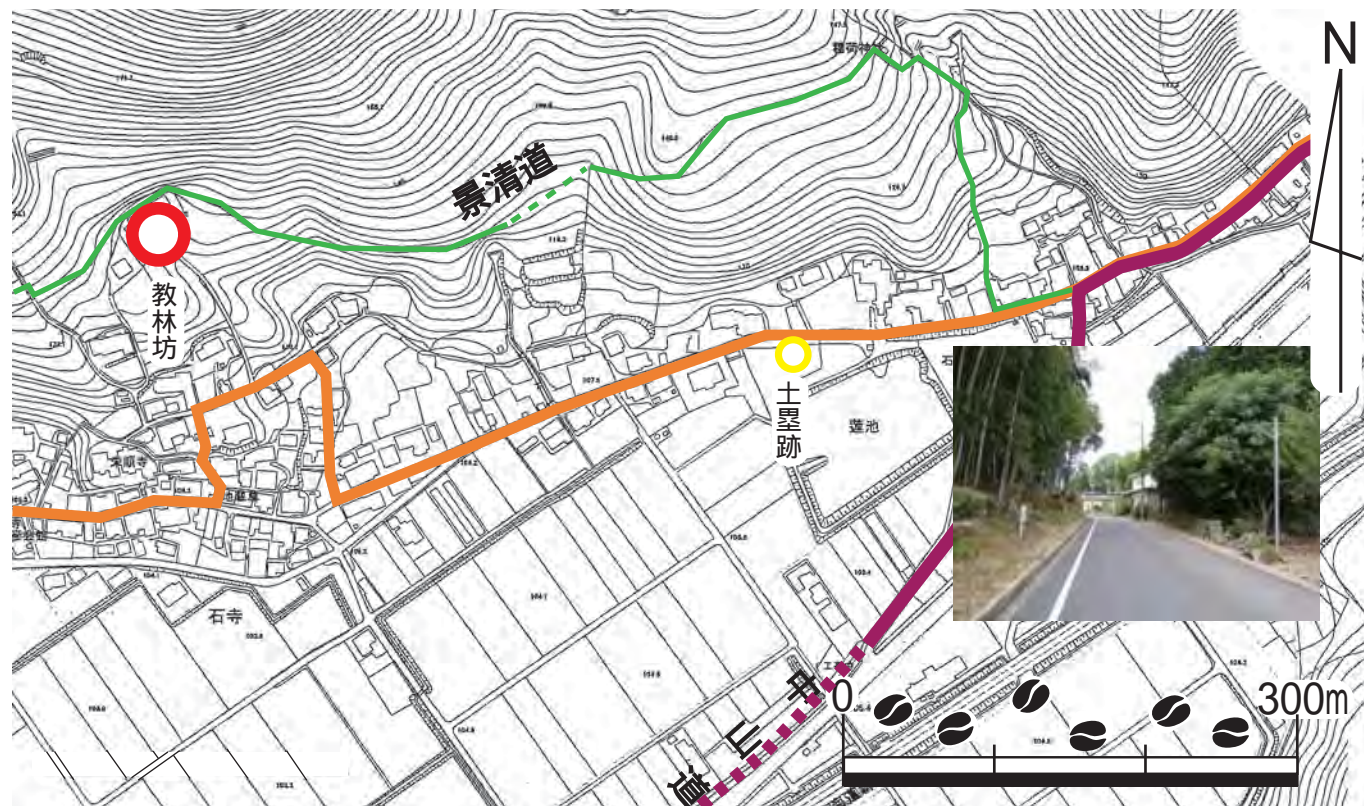
教林坊は、寺伝によれば聖徳太子が山内に開基した33ヶ坊の一つとされていますが「寺社分限帳」によれば天正13年(1585)に創立されたと記されています。その後、他の子院が無住になって廃坊となる明治以降も唯一存続し、その間一時無住となるものの現在まで山麓で法灯を守り続けています。

教林坊所蔵の文化財としては、**近江八幡市指定有形文化財**となっている木造釈迦如来座像くすりと庫裏・表門、**近江八幡市指定名勝**となっている庭園があります。木造釈迦如来座像は一木造りで室町時代の作品です。庫裏は江戸時代前期の建築と考えられ、入母屋造りの茅葺き屋根さんかむらぶきの庇がめぐっています。西側が庭に面して座敷となっており、中央部が式台と寝間、東側が土間となっています。表門は江戸時代後期の建築と考えられる薬医門やくいもんです。庭園は、小堀遠州こぼりえんしゅうの作ともいわれているもので、巨石と池を配し、庫裏の座敷から庭を觀賞する池泉觀賞式ちせんかんしゅうしきの庭園です。また現在早稲田大学所蔵となっている教林文庫は、もと教林坊に所蔵されていた典籍類です。昭和27年(1952)に住職辻井徳順師が亡くなった後、早稲田大学が購入しました。仏教書を中心に、日記・記録類、説話集、神道関係の資料や縁起類など、江戸から明治にかけての写本・版本類約1200点で構成されています。

拝観日：11月1日～12月10日は秋の特別公開で毎日拝観可能、それ以外は、土日祝日のみ拝観可。その他の日は20名以上応相談。

拝観料：大人500円 小中学生200円

電話：0748-46-5400



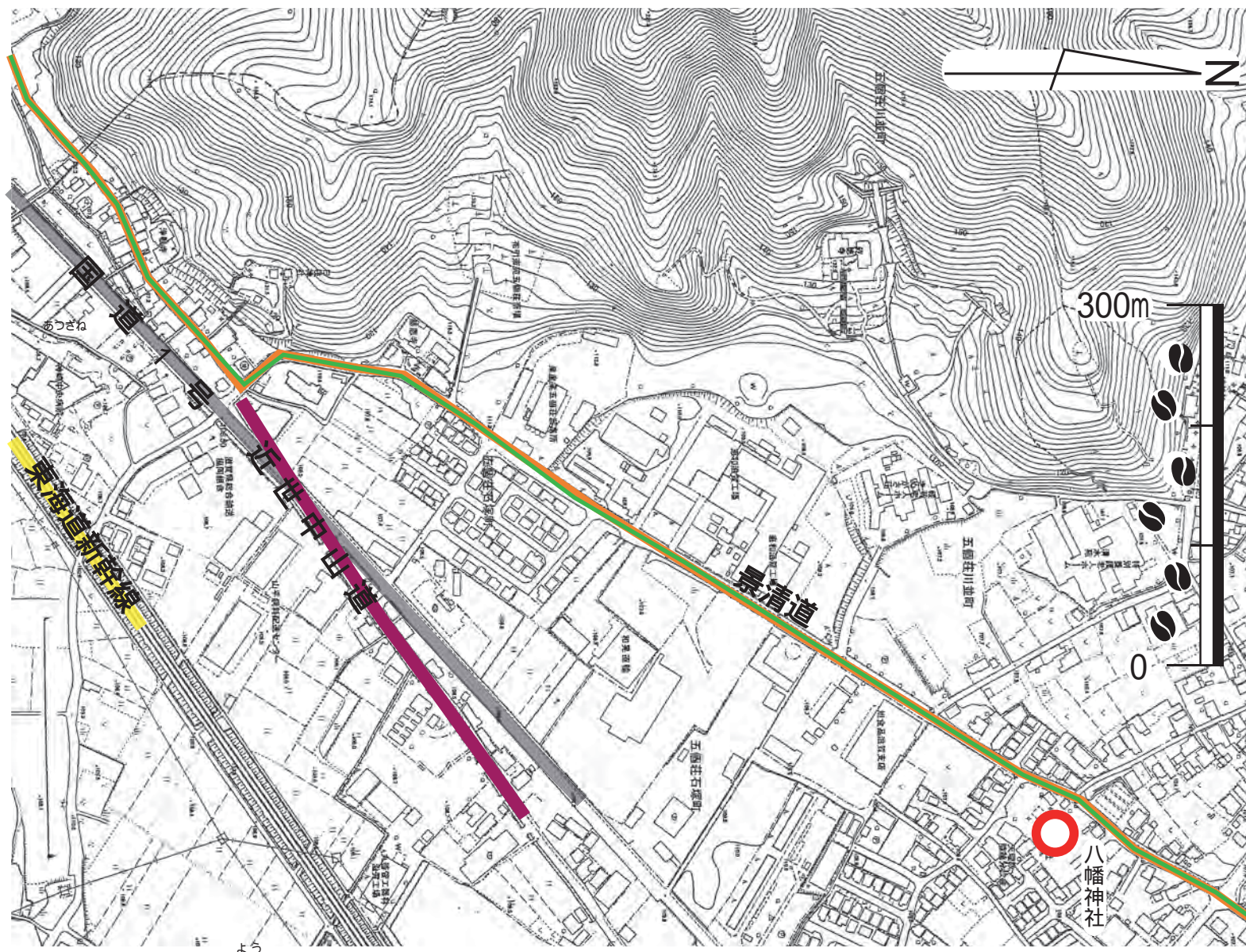
中山道

中山道は江戸幕府によって整備された五街道の一つで、江戸と京を内陸部で結ぶ道です。海沿いに行く東海道とは対称的です。

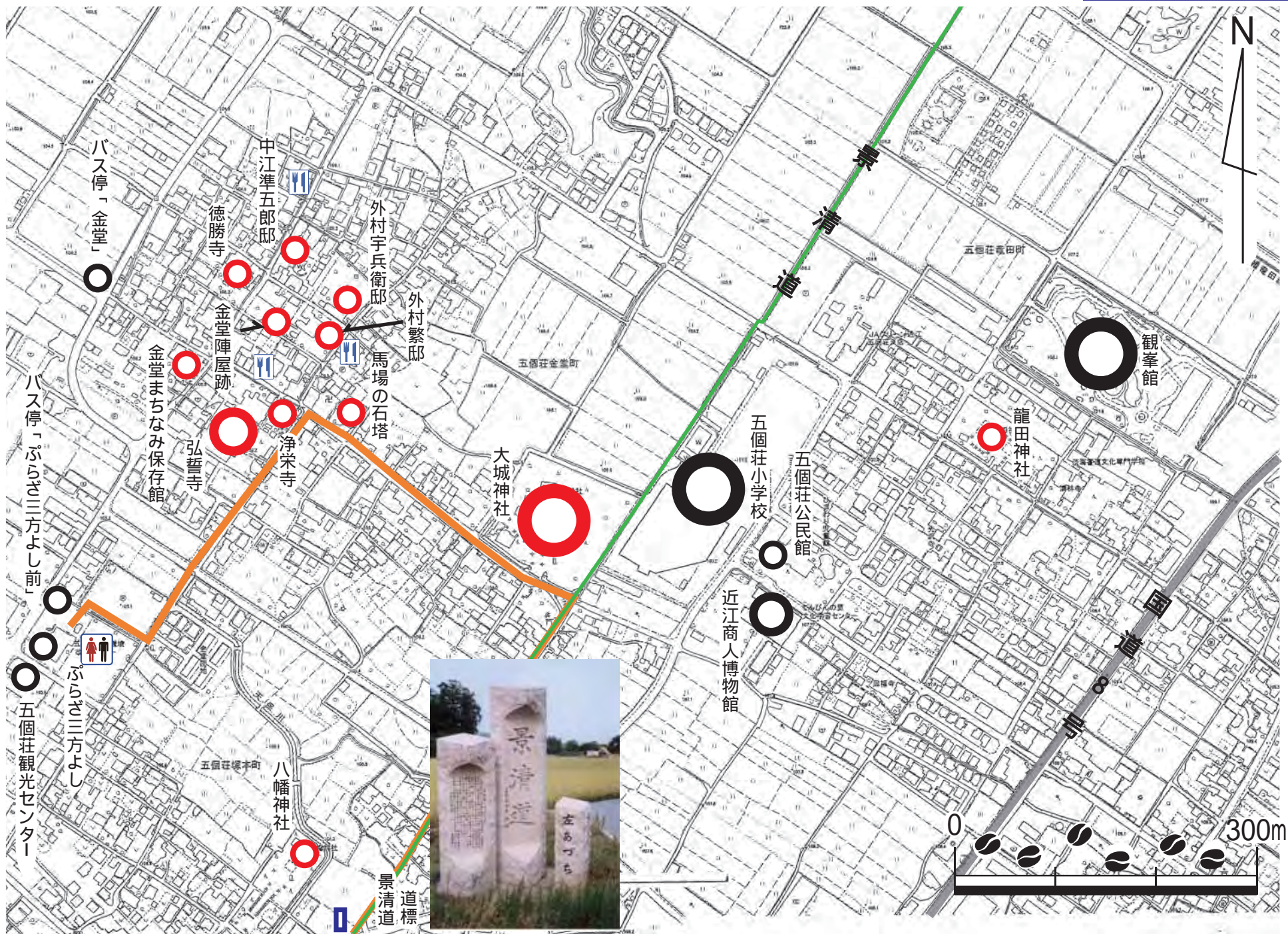
全部で69の宿がありましたが、近江では60番目の柏原より醒井・番場・鳥居本・高宮・愛知川・武佐・守山を経て草津で東海道と合流し、大津を経て京にいらします。この道は、古代の東山道を踏襲したのですが、中世には東海道とも呼ばれ、東国と畿内とを結ぶ主要幹線でした。

六角氏の居城観音寺城は、この道をにらむ位置に築かれました。山麓の城下町石寺へは、集落南側の奥石神社付近で中世東海道から分かれた道が集落内を通り、集落東端の清水鼻で再び中世東海道と合流します。街道を通る人々を城下町へと取り込もうという意図がうかがえるのです。

また、この中世東海道は織田信長が足利義昭を擁して上洛したルートでもあります。永禄11年(1568)9月7日に岐阜を出発した信長は、8日に高宮、11日に愛知川を経て12日に観音寺城と中世東海道を挟んで南に位置する箕作山城を攻撃、13日に六角承禎・義治父子が退城した観音寺城に



入ります。その後、信長は義昭を美濃から呼び寄せ、義昭は22日織山山内にある桑実寺に到着しました。義昭と合流した信長は、そこから義昭を先導するように京へ向かい、守山・志那・大津を経て、京に入ったのは9月26日のことでした。



八幡神社と五重石塔

八幡神社は、観音寺城の鬼門の守護神と伝えられます。境内に建つ五重石塔は、塔身に正安2年(1300)の銘が刻まれています(**東近江市指定文化財**)。



五重石塔

東近江市五個庄^{こんどう}金堂重要伝統的建造物群保存地区

生産技術の向上や貨幣経済が広まったことで、日本では中世以降商業が発展しました。近江でも商業に携わる者達が各地に現れ、近世以降「近江商人」として発展しました。それが背景となって、滋賀県内には商人の本拠地となった集落が各地に残されています。その中でも伝統的な建造物が多数存在し、周辺の水田とともに独特の景観を形成している東近江市の金堂集落は保存すべき重要な地区(国の**重要伝統的建造物群**)となっています。

金堂の歴史は古く、その名はかつてこの地に存在したといわれる聖徳太子創建の寺院の金堂が由来とされています。しかし、現在の集落の基礎ができたのは江戸時代に入ってからです。金堂が大和郡山藩の飛び地領となった際に当地を治めるため陣屋が設置されますが、この陣屋を中心に集落は発展していき、明治時代に至って現在の姿が成立しました。

集落は約1町ごとに平行に並ぶ通り(代表例は東西方向の馬場通り、南北方向の弘誓寺前、勝徳寺前通り)が骨格となる、北に対して33度東に振る古代以降の条里を継承したほぼ碁盤の目状の区画となっています。ほぼ中央に位置する陣屋跡地(現在の稻荷神社)の周囲に弘誓寺などの規模の大きな寺社が配置され、更にその周囲に江戸時代後期から明治・大正・昭和戦前期にかけての商人屋敷、伝統的な農家が建ち並んでいます。集落内には小規模な通りが設置され、馬場通りに面しては「馬場」と呼ばれる

広場もあります。この「馬場」には年号を記されたものとしては滋賀県最古(正安2年、1300年)の石造五輪塔が建っています。また、集落内には道路や屋敷に沿って走る水路が作られています。この水路からは屋敷内に「かわと」や「あらいと」などで水を引き込み、生活用水に利用していました。

金堂の近江商人は、主に江戸時代後期から明治・大正・昭和戦前期にかけて、呉服や綿・絹製品を中心に、全国を股にかけて取引を行いました。農閑期の行商を特徴とした金堂の商人は、地元には店を構えず、本宅のみを構えていました。中心部に建てられた弘誓寺や浄栄寺、大城神社に残る大規模な建造物には商人たちの財力がつぎ込まれています。

商人の本宅として建てられた住宅はほとんどが明治・大正時代のものです。築地塀や板塀で囲まれた広大な敷地内に意匠を凝らしながらも質素堅実な風情の和風建築として建てられており、切妻や入母屋造りの主屋を中心に数寄屋風の離れや土蔵・納屋が配されています。敷地内には池や築山^{つきやま}を配した日本庭園が設えられているのも特徴です。来客の応接に使用した洋館を構えている住宅もあります。商人屋敷の中には近江商人を題材に多数の小説を発表した、滋賀県を代表する純文学者外村繁^{とむらしげる}の生家もあります。

また、一部改変を受けながらも数多く残っている農家の住宅は、伝統的な形式である茅葺屋根の主屋と納屋等で構成されており、湖東平野の農家住宅の典型を示しています。



弘誓寺前の家並み

大城神社

明治以前は大宮神社・天満宮と称し、菅原道真を祀っていました。観音寺城の鬼門にあたる北東の位置にあることから、観音寺城の守護神として信仰されていました。また、正安2年(1300)2月の銘を持つ神社所蔵の石造五輪塔(馬場の石塔)が、神社近くの馬場通り沿いに建っています。鎌倉時代の優品です(東近江市文化財指定)。

また、社標の文字は、時の総理大臣
このえがみまる
近衛文麿の筆によるものです。



左：大城神社 上：馬場の石塔

勝徳寺

永正12年(1515)開基の真宗大谷派寺院。江戸時代は通りをはさんだ向いに大和郡山藩の陣屋があり、大和郡山藩主柳沢家の供養堂とされていました。現在、寺の入口となっている長屋門は、明治5年(1872)、大和郡山藩陣屋から移されたものといわれています。



勝徳寺長屋門

浄栄寺

聖徳太子開基と伝えられる寺院。太子がこの地を訪れた際、不動坊という僧が太子を尊敬し、協力して金堂を建てました。それが金堂という地名の由来とされています。その後不動坊は立ち去りましたが、太子はこの不動坊が不動明王の化身であったことを知り、ここに不動院を建てたのが浄栄寺の起源とされます。その後不動院は朽ち果てましたが、宝治元年(1247)、浄栄法師が浄土宗寺院として再興し、浄栄寺と号するようになりました。



浄栄寺

金堂陣屋跡

貞享2年(1685)に大和郡山に移った藩主本多忠平が近江国内の領地支配のために設けた陣屋。享保9年(1724)に柳沢家が藩主となってからも継承され、明治5年(1872)に廃止されるまで存続しました。



金堂陣屋跡(稲荷神社)

くせいじ
弘誓寺

浄土真宗大谷派の寺院。寺伝によれば、那須与一の孫といわれる愚咄ぐとつが、本願寺第三代覚如の弟子となり、犬上郡石畠に一字を建立したのが弘誓寺の起源とされ、天正9年(1581)、金堂の地に移されました。

入母屋の大屋根が印象的な本堂は、宝暦5年(1755)頃から建てられたもので、宝暦14年(1764)には主要部が完成しています。江戸後期の典型的な真宗大型本堂として国の**重要文化財**に指定されています。また、本堂造営に関わる文書が4点が残されている点も貴重で、本堂とあわせて**重要文化財**に指定されています。

元禄5年(1692)に建立された表門の瓦には、那須与一にちなんで扇の紋が入っています(**東近江市指定文化財**)。



弘誓寺本堂

金堂まちなみ保存交流館

金堂地区の近江商人外村宗兵衛の屋敷でしたが、のちに三中井百貨店の創業者中江4兄弟の三男富十郎の住居となりました。平成20年11月、NPO法人金堂まちなみ保存会の活動拠点となり、まちなみ保存交流館として開館しました。



金堂まちなみ保存交流館

休館日：月曜日・祝日の翌日・お盆(8月14～16日)・年末年始

電話：0505-801-7101

五個荘近江商人屋敷

金堂地区内には中江準五郎邸・外村宇兵衛邸・外村繁邸の三つの近江商人屋敷があります。また金堂地区を少しはずれたところに藤井彦四郎邸があります。

中江準五郎邸

明治38年(1905)、朝鮮半島のテグみなかいに三中井商店を開店した中江勝治郎の末弟準五郎の屋敷です。昭和8年には、ソウルにビルを建てて本店とし、翌年株式会社三中井百貨店として本格的な百貨店経営に乗り出しました。中江家には長男勝治郎以下4人の兄弟がおり、この屋敷は準五郎が本家勝治郎より分家したものです。屋敷は2階建・切妻瓦葺で、蔵2棟と地泉回遊式の池があります。

休館日：月曜日・祝日の翌日・年末年始

電話：0748-48-3399



中江準五郎邸

外村宇兵衛邸

外村宇兵衛は六代目外村与左衛門の末子です。文化10年(1813)に、ごぶくぶとものるいと左衛門から独立して商いを始めました。主として呉服太物類を扱い、明治時代には全国長者番付に名を連ねるほどでした。

屋敷は、明治期の隆盛時には主屋・納屋・書院など十数棟に及ぶ建物が建てられていました。その後老朽化とともに多くが取り壊されましたが、現在、茶室が復元され、主屋が改修されるなど明治期の姿に修復されています。

休館日：月曜日・祝日の翌日・年末年始

電話：0748-48-5557



外村宇兵衛邸

とのむらしげる
外村繁邸

4代目外村宇兵衛の妹みわが婿養子吉太郎を迎えて分家したのが外村繁(1902～61)家の始まりです。東京日本橋と高田馬場に呉服木綿問屋を開き、活躍しました。吉太郎の三男が小説家の外村繁です。

東京帝国大学在学中に梶井基次郎らと同人雑誌を創刊し、文学を志しました。父吉太郎の死後いったん家業を継ぎましたが、後に弟に家業を託し、再び文学の道に戻りました。「草筏」「筏」などの近江商人を題材とした作品を残しました。

休館日：月曜日・祝日の翌日・
年末年始
電話：0748-48-5676



外村繁邸

藤井彦四郎邸

藤井彦四郎(1876～1956)は、3代目藤井善助の次男として生まれました。後に分家し、明治40年(1907)藤井糸店を創業して一代で成功を収めました。

屋敷には、彦四郎自身の構想で珍石・名木を配し、琵琶湖を模した池を中心にした地泉回遊式の大庭園をはじめ、主屋・客殿・洋館・土蔵などの建物が建ち並んでいます。

休館日：月曜日・祝日の翌日・年末年始
電話：0748-48-2602



藤井彦四郎邸

ぶらざ三方よし

金堂地区まで歩いて5分の距離にあり、見学の拠点として最適です。また館内には観光案内所があり、各種パンフを常備しています。

休館日：月曜日・祝日の翌日・年末年始
電話：0748-48-6678



ぶらざ三方よし

てんびんの里 近江商人博物館

近江商人の軌跡を紹介する施設です。映像や模型・レプリカを用いて親しみやすい展示を行っています。

休館日：月曜日・祝日の翌日・年末 年始
電話：0748-48-7101
入館料：大人200円 小人100円



近江商人博物館

観峰館

書道文化をテーマにした博物館。世界の文字資料などが展示されています。

休館日：月曜日・祝日の翌日・年末 年始
電話：0748-48-4141
入館料：一般500円、大学・高校生 300円、



観峰館

お得な共通入館券

中江準五郎邸・外村宇兵衛邸・外村繁邸3館共通

大人600円 小人300円

上記3館・藤井彦四郎邸・近江商人博物館5館共通

大人900円 小人410円